
杉山 弘晃 (すぎやま ひろあき)



【書名】 電脳山荘殺人事件

【著者】 天樹征丸

【発行】 講談社

「金田一少年の事件簿」という漫画の小説版で、これは3作目です。普通の読書好きの人の目にはとまらないかもしれませんが、これまで読んだことのある推理小説の中でトップレベルの面白さでした。

ネタばれにならない程度に書きますが、この小説は最初から犯人の名前がわかります。そんなのは刑事コロンボや古畑任三郎のような倒叙ミステリーと同じじゃないかと思われるかもしれません。しかしこの小説は特別で、犯人の名前は分かっているのに誰が犯人だか分からないようになっているのです。これは小説ならではの手法なのでとても感心しました。何を言っているのか分からないかもしれませんが、興味が沸いた人は探して読んでみてください。堅苦しい本ではないので、読書に慣れるには良いと思います。

【書名】 ダイスをころがせ！

【著者】 真保裕一

【発行】 講談社文庫

タイトルからは内容がよくわからないですが、選挙に出馬する若手（とはいえ、34歳ですが）達のお話です。

主人公の元同級生が出馬し、主人公はその秘書を務めます。お金や権力よりも理想を追い求める感じの選挙活動を繰り広げ、そのため直面する問題をなんとか乗り越えていく様子は「青臭い」とも言えますが、非常に勇気づけられます。選挙なんていう堅苦しいテーマを扱っており、しかも上下巻で長めなのですが、娯楽性に富んでいて楽しく読めると思います。さすがに出馬したくはならないでしょうけれど、投票に行ってみようかなという気にはなると思うので、選挙権を持つようになったみなさんにぜひ読んでみてもらいたいです。

【書名】 伝わるデザインの基本 増補改訂版

【著者】 高橋佑磨、片山なつ

【発行】 技術評論社

研究やアイデアを、PowerPoint 等で作成したスライド等を用いて発表する機会があると思います。その際、内容はもちろん重要ですが、どんなに素晴らしい内容だとしても聴衆に伝わらなければ意味がありません。この本は、見やすく伝わりやすい資料を作るための基本的なことを教えてくれます。もちろん、この本自体も見やすく伝わりやすいように作られています。資料作成に限らず、相手の事を考える思いやりの大切さを理解できると思います。ちなみに、大体的内容はウェブページでも見られます。

【書名】 バッタを倒しにアフリカへ

【著者】 前野 ウルド 浩太郎

【発行】 光文社

奇妙なミドルネームが付いていますが、著者は日本人の研究者です。

著者の研究内容についてというよりも、研究活動におけるドタバタを面白おかしく書いたものなので、難しい内容はありません。著者の行動力・精神力に驚かされつつ、研究というものの楽しさを感じることができると思います。実際の研究生活ではもっと辛く苦しい場面が沢山あるとは思いますが。

【書名】 自動人形の城

【著者】 川添愛

【発行】 東京大学出版会

11歳の王子を残して城中の人間が自動人形にされてしまった、という物語です。自動人形は命令の通りに動いてくれるのですが、なかなか思い通りには動いてくれないために様々なトラブルが起こります。

著者は言語学（現在は情報科学かも）を専門としており、コミュニケーションやプログラム作成等で起こりえる問題を面白おかしく認識させてくれる内容です。

【書名】 数学の言葉で世界を見たら

【著者】 大栗博司

【発行】 幻冬舎

数学に関連した話題を掘り下げることで、数学のすばらしさを伝えてくれる本です。興味を引きそうな見出しをいくつか挙げると、

「ギャンブルで負けない方法」、
「 $(-1) \times (-1)$ はなぜ1になる?」、
「素数出現にはパターンがある」

などです。

全9話で構成されていて各話はほぼ独立しているので、気になった話だけ読むことができます。一般向けに書かれているので、数学の知識はそれほど必要とされていません。まじめに計算すると大変な部分もありますが、数字や数式はとりあえずそのまま受け入れて読み進めていくこともできます。

【書名】 素粒子の世界

【著者】 秋本祐希

【発行】 洋泉社

素粒子物理学理論の研究が専門なので、そっち方面でも1冊だけ挙げておきます。ちなみに素粒子というのは、我々や宇宙を作っている最小の材料のことです。内容的に幾分高度なので、分かりやすく書かれていたとしてもなかなか読みづらいことが多いのですが、この本はイラストが多用されていてとっつきやすいです。著者は素粒子実験で博士号をとっているので、内容は結構しっかりしています。

【書名】 総合的研究 記述式答案の書き方——数学I・A・II・B

【著者】 崎山理史、松野陽一郎

【発行】 旺文社

今この文章を目にしているあなた。お願いですから、第1章の第1部（6ページ分）だけでいいので読んでみてください。できれば学生全員に読んでもらいたい部分です。

この本には、良い答案の書き方が記されています。良い答案とは、採点者が読みやすい答案です。この本の最初には悪い答案の例が示されていますが、それと同様のひどい答案が、残念ながら実際のレポート課題等で頻繁に見受けられます。数学の答案に限らず、提出書類においては読み手の存在を無視したような書き方は好ましくありませんので、この本に書かれていることは数学以外の様々な場面でも役立つと思います。